

# 青年期における高機能広汎性発達障害者の自己理解の発達の变化について —当事者へのアンケートおよびインタビューによる質的検討—

## The Development of Self-Understanding of High-Functional PDD persons in adolescents

### —Qualitative study from questionnaire and interview—

筒井 文恵 (Fumie Tsutsui) 指導：菅野 純

#### 【問題と目的】

従来、高機能広汎性発達障害（以下、HFPDDと略記する）児・者は思春期・青年期においてしばしば自尊心の低さ、自己アイデンティティの拡散などの二次障害を呈することが指摘されてきた(e.g. Hill, Berthoz & Frith, 2004)。二次障害の根源と考えられているのは、自分自身をどのように捉えるかという自己理解の問題である。杉山（1999）もHFPDD児・者が抱える青年期の重要なテーマの1つとして、自分自身をどう捉えるかという問題を指摘しており、HFPDD者が青年期における健全な発達を遂げるためには、自己理解形成への支援が不可欠であると考えられる。しかし、これまで彼らの自己理解に対する研究はあまり検討されていない。また、HFPDD者本人による自伝の出版など(e.g. ニキ・藤家, 2004) から、HFPDD者が独自の自己理解を有していることは示唆されている一方で、回想ではない今まさに彼ら自身の捉える自己理解とその変化について実証的に検討した研究は少ない。そこで本研究はHFPDD者の青年期における自己理解の特徴について、探索的に検討することを目的とした。

#### 【研究Ⅰ】

《目的》中学生、高校生、大学生・社会人のHFPDD者を対象に、自己理解の発達の变化の概観を横断的に検討する。  
《調査対象》HFPDD者38名（中学生11名（平均=13.2±0.93歳）、高校生16名（平均=16.5±1.07歳）、大学生・社会人11名（平均=19.1±0.75歳））  
《調査方法》佐久間ら（2000）を参考に、自己理解に関する質問項目を設定し、自由記述で回答を求めた。  
《結果と考察》得られた回答を、佐久間ら（2000）をもとに一部改訂した分類表を用い、上位カテゴリー（身体・外的属性／行動／人格特性の3項目）に分類し、さらにそれぞれを下位カテゴリーに分類した。また、人格特性語を極（正・負）に分類し、その発達の变化についても検討を行った。上位カテゴリーにおいて、学年（3水準）×カテゴリー（3水準）で2要因分散分析を行ったところ、カテゴリーの主効果が有意であった。多重比較の結果、全学年で身体・外的属性に比べて、行動、人格特性カテゴリーが有意に高くなった。この結果は、青年期のHFPDD者の自己理解が、定型発達者同様、周辺の記述から中心的記述へと移行して

いることを示したものであるといえる。下位カテゴリーの分類の結果からは、中学生、大学生・社会人に比べて高校生の「誠実的行動」の記述が有意に高かった。これは、高校生という時期がHFPDD者にとって社会的適応において重要な位置を占めていることと関連することが推測された。さらに、人格特性語の極の分類の結果からは、中学生から高校生にかけて、否定的な人格特性語の使用が増え、特に「情緒不安定性」に関する記述が増える傾向が明らかになった。つまり、中学生から高校生にかけてHFPDD者の自己理解の内容が深化し、かつ自己否定的になりやすいという傾向が示唆された。

#### 【研究Ⅱ】

《目的》研究Ⅰで自己理解に深化のみられた高校生のHFPDD者に対して個別のインタビュー調査を行い、個人が時間軸に沿ってどのように自己理解を変化させてきているかを、事例的に検討する。

《調査対象》高校生のHFPDD者6名（A～F）

《調査方法》個別の半構造化面接

《結果と考察》各対象者から得られた自己に関する語りを、過去、過去から現在までの変化、現在、未来の時間軸に沿って事例的に検討を行った。また、6名の回答を共通するテーマでコード化を行ったところ、過去の自己に関するテーマとして、(1)過去の行動の客観的振り返り、(2)過去の行動の意味付け、(3)過去の体験からの影響の3テーマ、過去から現在までの変化に関するテーマとして、(4)対人関係的变化、(5)心理的变化、(6)行動的变化の3テーマ、現在に関するテーマとして、(7)現状の認識、(8)自己イメージ、(9)自己の特性への評価、(10)他者との関係の4テーマ、未来に関するテーマとして(11)将来展望、(12)願望、(13)理想の自己イメージの3テーマに分類された。